

夢見る者の夢解釈（Ⅰ）

——創世記 40 章——

柊 暁 生

I プロローグ

創世記 37 章にはヨセフ自身の夢の物語があり、それについては「夢見る者の夢—ヨセフの夢の文学的構造（創世記 37 章 5 節～11 節）—」と題してすでに考察した¹。今回は夢見る者であるヨセフが、ファラオの二人の家臣の夢を解く物語、創世記 40 章を文学的観点より分析する。40 章の場面は牢獄で、これは 39 章に直接的に結びつくものであるが、夢が主題という点で、40 章は 37 章 5 節～11 節に深く関連する。

37 章でヨセフは二回夢を見る。40 章でファラオの二人の家臣は同一夜にそれぞれ夢を見る。37 章はヨセフ一人、40 章はファラオの家臣二人と人数は違うがどちらも夢は二つである。ただ両者の大きな相違は夢の解釈の有無である。37 章のヨセフの夢の物語には夢の解釈はなかったが、40 章のファラオの二人の家臣の夢の物語にはヨセフによる夢の解釈がある。彼らにとって夢の意味がわからなかったからである。しかしながら、37 章のヨセフの夢と 40 章のヨセフの夢の解釈には構造的に共通するところがある。

37 章でのヨセフの夢は二つ合わせれば天と地、すなわち世界という一つの意味をあらわすものである²。40 章でのヨセフによるファラオの二人の家臣—給仕役と料理役も両者で「飲食」という一つの意味をあらわす³—の夢の解釈は、どちらも「三日目に頭を上げる」という同一のものである。しかし、その意味は一方は生き、他方は死ぬという相反するも

¹ 藤女子大学キリスト教文化研究所『紀要』第 4 号、17～41 頁。

² 拙稿、上掲書 24 頁参照。

³ この問題については 8 頁参照。

のである。37 章において夢は二つで一つであるが、40 章において夢の解釈は一つで二つである⁴。このように、37 章の夢と 40 章の夢の解釈の文学的構造を比較して考察すると、その深層において強い関連があることがわかるが、ここでは 40 章のヨセフによる夢の解釈に焦点をあてて考えて見る。

II 創世記 40 章の全体的構造

(1) 40 章の文学的構造

C. Westermann は創世記の注解書の中で、40 章の文学的構造は 14 節～15 節のヨセフの嘆願を中心にシンメトリーであるとしている⁵。

しかしながら、私の考えでは 40 章全体をシンメトリーとして捉えるには無理があると思われる。14 節～15 節のヨセフの嘆願を中心に据えるのは内容的に言って重要なことではあるが、これは給仕役の夢の解釈のあとに続く話であり、嘆願の結果は 23 節にある。C. Westermann は 23 節を Vergessen とし、1 節～4 節の Begegnung に対応するものと見る。しかし、厳密にはこれは話の内容から対応するものとは考えられない。14 節～15 節のヨセフの嘆願に対して 23 節の結果が対応するからである。また彼は、20 節～22 節は Eintreffen とし、5 節～8 節の Erkundigung と対応させているが、20 節～22 節は 9 節～11 節+12 節～13 節と 16 節～17 節+18 節～19 節の Traum+Deutung の結果、夢の実現としてあるもので、5 節～8 節に関係づけるのには無理があると思われる。

そこで、原文に即して 40 章全体の構造を分析すれば、次のように表示することが出来るのではないかと考える。

⁴ 37 章：一人→二つの夢→同一の意味。

40 章：二人→二つの夢→同一の解釈表現→二つの結果

⁵ Begegnung (1-4), Erkundigung (5-8), Traum (9-11)+Deutung (12-13) \
 ↓ ↓ ↓ Bitte (14-15)
 Vergessen (23), Eintreffen (20-22), Traum (16-17)+Deutung (18-19) /

“Der Aufbau des Kapitels in sich ist in seiner Symmetrie ein Musterbeispiel der Erzählkunst des Verfassers.” C. Westermann, *Genesis 37-50* (BKAT I/3; Neukirchen 1982) 71 頁。

1. 給仕役と料理役

給仕役と料理役の登場	1 節—4 節
給仕役と料理役の夢	5 節—8 節

2. 二人の夢とその解釈

給仕役の長の夢	9 節—11 節
ヨセフによる夢の解釈	12 節—13 節
ヨセフの嘆願	14 節—15 節
料理役の長の夢	16 節—17 節
ヨセフによる夢の解釈	18 節—19 節

3. 二人の夢の実現

三日目	20 節
給仕役の長の夢の実現	21 節
料理役の長の夢の実現	22 節

4. ヨセフの嘆願の実現？ 23 節

(2) 40 章の文脈的位置—39 章との関係—

① 40 章は「これらの事の後」という時間的経過をあらわす定型句で始まり、物語のあらたな展開を開始する。41 章が「二年の後」という具体的な年数でもってあらたな場面を設定するのとは少し異なる⁶。この「これらの事の後」(way^{hî} 'aḥar hadd^qbarîm ha'elleh)という Überleitungsformel⁷ はすでに 39 章 7 節で用いられてる。39 章の 1 節から 6 節までは、ポティファルの家でのヨセフのことについて語られているが、ポティファルの妻の登場によるあらたな物語の展開をあらわすために 7 節でこの定型句が使われている。「これらの事の後、主人の妻はヨセフに色目を使い言った」。それゆえ、40 章 1 節でまた「これらの事の後」が言われるのは、ポティファルの妻の誘惑とは別な新しい物語が始まることをあら

⁶ 「二年の後、ファラオは夢を見た」(41 章 1 節)。「これらの事の後」(40 章 1 節)というのがいつのことであるかわからないが、37 章 2 節でヨセフが 17 歳、41 章 1 節で 2 年後、同 46 節で 30 歳と述べられていることから、彼が 26 歳の時とも考えられる。

⁷ C. Westermann, 上掲書 72 頁。

わすためと考えられる。「これらの事の後」という定型句はヨセフ物語の中では他に 48 章 1 節にもあり、そこでも 40 章と同様にあらたな場面を展開するため、不定な時間的経過を表現するために用いられている⁸。「これらの事の後」は前との結びつきを述べながら、新しい出来事を導入するために用いられる定型句である⁹。

② この「これらの事の後」という定型句によって、40 章は 39 章と時間的には区別される。しかし、空間的設定は同じであり、この点において 40 章は 39 章から直接に続いているのであり、切り離すことは出来ない。広く言えばエジプト、狭く言えば牢獄がその場所である。

ヨセフのエジプトとの関係は、「彼らはヨセフをエジプトに連れて行った」という 37 章 28 節からであり、エジプト王の臣下ポティファルの家との関係は「ミデアン人は彼（ヨセフ）をエジプトに、すなわち、ファラオの役人、侍従長のポティファルに売った」という 37 章 36 節からである。39 章は 37 章を受け継いで始まり、ヨセフはポティファルの家において幸い（39 章 2 節～6 節）であったが、「これらの事の後」（39 章 7 節）、ポティファルの妻がヨセフを誘惑し、彼がこれを拒絶すると、彼女は夫に讒言し、ヨセフは牢獄に投げ込まれることになる。幸いが一転して禍に変わる状況を導入するために「これらの事の後」が挿入されている。ヨセフが牢獄に入れられるのは 39 章 20 節からで、必然的に 40 章はこの設定の続きである。

それゆえフランス語訳聖書 TOB は、39 章 20 節後半から 41 章 13 節までを“Joseph en prison”という見出しのもとに区分する。その中で、ファラオの家臣の二人の夢の物語は、40 章 4 節後半から 23 節まで続くものとし、小見出しを“Les songes des officiers”としている¹⁰。G. Wenham は、39 章 21 節から新しいセクションが始まるとして 40 章

⁸ 「これらの事の後、ある人がヨセフに『あなたのお父さんが病気です』と言った」（48 章 1 節）。

⁹ 創世記では他に 15 章 1 節、22 章 1 節。

¹⁰ 39 章 1 節から 20 節前半までを“Joseph en Egypt”とし、41 章 14 節から 56 節までを“Elevation de Joseph”と区分する。Traduction Œcumenique de la Bible, Ancien Testament (Paris 1978) 105～111 頁参照。

23 節までを一つの単位と把握し、39 章 2 節～20 節と 39 章 21 節～40 章 21 節とが平行であるとする¹¹。また、W. Coats は 39 章 20 節後半から 40 章 23 節までを牢獄という場所で設定される一つの単位と考える¹²。

③ さらに 40 章は物語の筋の展開¹³、語句の用法や意味の類似などと言った点から、39 章との密接な関連を読み取ることが出来る。

どちらの章においても罪を犯すこととの関係で一ヨセフの場合には冤罪であるが一上司が怒って部下を牢屋に投げ込むという話がある¹⁴。39 章で、ヨセフはポティファルの妻から誘惑を受けるが、拒絶して「どうしてわたしはこの大きな悪をおこなって、神に罪を犯すことができません」（9 節）と言う。それに対し、40 章では「エジプト王の給仕役と料理役とがその主君エジプト王に罪を犯した」（1 節）とある。「罪を犯す」という動詞はどちらも同じ「ハター」（hth）である。

ヨセフの場合、彼は罪を犯さなかったのであるが、主人はその妻の讒言によって「激しく怒る」（39 章 19 節）。エジプト王の二人の家臣の場合には、ファラオは彼らに向かって「憤る」（40 章 2 節）。39 章の「激しく怒る」は「ハラー」（hrh）で、40 章の「憤る」は「カザフ」（qsp）という違いはあるが、どちらもはげしく怒ることをあらわす動詞が使われている¹⁵。

¹¹ G. Wenham, *Genesis 16-50* (WBC2; Dallas 1994) 380 頁。39 章 21 節から 40 章 23 節の構造に関しては、39:21-23, 40:1-4, 5-19, 20-22, 23 に区分する。同頁参照。

¹² W. Coats, *Genesis* (Michigan 1983) 276-277 頁。彼は 39 章 1 節から 41 章 57 節を “III Disgression” として、(A) Joseph with Potiphar’s wife, 39:1-20a, (B) Joseph in prison, 39:20b-40:23, (C) Joseph before the pharaoh, 41:1-57 の三部に分割する。その他は、I. Exposition, 37:1-4, II. Complication, 37:5-36。D. W. Cotter は、39 章 20 節～40 章 23 節を “The trusty who reads dreams” として一単位とみなす。*Genesis* (Berit Olam, Minnesota 2003) 294 頁参照。但し、後述するように我々は時間的経過によって 40 章を見る。

¹³ V. P. Hamilton, *The Book of Genesis Chapters 18-50* (NICOT; Michigan 1995) 475 頁参照。

¹⁴ G. Wenham は両者の間にコントラストがあると見る。上掲書 381 頁参照。

¹⁵ 動詞 “qsp” は 41 章 10 節において、40 章 2 節の引用としても使われている。

その結果、39章でポティファルはヨセフを「王の囚人をつなぐ牢屋 (bêt hassōhar) に投げ入れる」(20節)が、40章でファラオは家臣の二人を「侍従長の家の牢、すなわちヨセフがつながれている牢屋 (bêt hassōhar) に入れる」(3節)という事態が生じることになる¹⁶。

(3) 40章の時間的経過

ほとんど時間的設定のない39章と違い¹⁷、40章は「これらの事の後」(1節)という書き出しのもと、明白な時間的経過の記述がある。

① 「彼らは牢屋で数日を過ごした (wayyih^{ey}yû)」(4節)

この“wayyih^{ey}yû”(wayyiqtol, 3人称男性複数形)は1節の“way^{hi}” (wayyiqtol, 3人称男性単数形)と同じ用法であり、不定の日数(yamîm)の経過を表示している¹⁸。

② 「同一夜に」(5節)

夢を見るのは給仕役と料理役という別々の二人であるが、その二人が同一夜 (b^{el}ay^{el}lah 'eḥad) に夢を見るという時間的同一性が強調されている。ここで二つは一つにされている。二人にとって時間的に(夜に)同一というのは、のちほどに登場する三日も時間的に(昼に)同一であるのに対応する。夢およびその結果は別々であるが。4節の「日々」(複数)に対し、5節では「夜」(単数)が対比的に述べられている。

③ 「朝に、ヨセフが彼らのところへ行ってみると」(6節)

5節の「夜」に、6節の「朝」が対応する。夜から朝への時間的推移がある。夜は二人であったが、朝はヨセフ一人で、人数は二人から一人へと移行する。

④ 「どうして、今日、あなたがたの顔色は悪いのですか」(7節)

¹⁶ G. Wenham はヨセフを中心に据えて、39:7-19 と 40:1-22 が “Human maltreatment of Joseph”, 39:20 と 40:23 が “Joseph left in prison” で並行的であるとするが、必ずしも厳密ではない。上掲書 380 頁参照。

¹⁷ 但し、「これらの事の後」(7節), 「毎日」(10節), 「ある日」(11節), 「～を待った」(16節) といったある種の時間的表現はある。

¹⁸ “yôm” (日) の複数 “yamîn” (数日) は創世記 24 章 55 節にも使われており、そこでは「数日、10 日ほど」と言われている。V. P. Hamilton は “for a lengthy period” と訳す。上掲書 474 頁訳文、及び注 6 参照。

ヨセフが二人に問いかけて言う言葉の中に、「今日」(hayyôm)という特定の時間が設定されており、4節の不定の数日間(yamîm)と区別される。

⑤ 「三つの枝は三日です」(12節) + 「三日のうちに」(13節)

「三つの籠は三日です」(18節) + 「三日のうちに」(19節)

「三日」(š'lošet yamîm)という日数は、給仕役と料理役の二人に共通する日数であるが、この日数は二人の運命が分かれるに至る重大な意味を持っている日数でもある。4節では牢屋にいる二人の不定の日数(yamîm)が言われていたが、12節～19節では二人の夢が実現するに至る「三日」という特定の日数(yamîm)が述べられている。

⑥ 「さて、三日目はファラオの誕生日であった」(20節)

「三日目」は王の誕生日で、特定の「日」(yôm)である。これは7節でヨセフが「何故あなたがたの顔は今日(hayyôm)そんなに悪いのですか」と二人に言う特定の日に呼応するであろう。また、20節は“way^{hî}”という書き出しで始まるが、これは1節が“way^{hî}”という書き出しで始まるのと文法的に同じ wayyiqtol (3人称男性単数形)である。

以上のことから、40章は時間の流れにそって物語が進展しているということがわかる。「これらの事の後」で始まる40章は、牢獄での数日(複数)が過ぎて、夜から朝へと時間は移る。そして、今日という日(単数)にヨセフは二人の夢を解き、その夢の実現が三日(複数)のうちにであることを言い、三日目(単数)は王の誕生日で、その日二人の夢は現実のものとなる。

III 給仕役と料理役 (1節～8節)

(1) 給仕役と料理役の登場 (1節～4節)

① 時間設定 (1節～4節)

1節～4節は、ヨセフがポティファルの妻の讒言によって牢屋に投げ込まれている話(39章)の続きとして始まる。1節の「これらの事」はヨセフが牢屋に投げ込まれたことを意味しており、その「後」あらたな事態がおこる。それは給仕役と料理役の二人が罪を犯し、ヨセフが閉じ込められている牢屋に収容されることである。その中での時間的経過は

「彼らは牢屋で数日を過ごした」(4節後半)という表現であらわされている。この時間的説明は「これらの事の後」(1節)という物語の書き出しに対応し、あらたな時間的段落を形成するものと考えられる¹⁹。

② 人物設定 (1節～2節)

39章においてはファラオの臣下ポティファルの家での出来事が問題であったが、40章においてはファラオの二人の家臣が見た夢の内容が問題となる。二人の家臣の一人は給仕役(*mašeqeh*)であり、もう一人は料理役(*ōpeh*)である。給仕役は「飲ませる」(*šqh*)という動詞に²⁰、料理役は「(パン)を焼く」(*ph*)という動詞に由来する²¹。一方は液体に関係し、他方は固体に関係する。二つ合わせて「飲食」という一つの全体を意味している。この二人は1節～2節ではファラオと関係し、3節～4節では侍従長とヨセフに関係する。

ただ問題なのは、この二人には個人名がなく²²、職名で三様に表現されていることである。給仕役に関しては、1, 5節で単に給仕役(*mašeqeh*)

¹⁹ 1節は“wayhî”(3人称単数)、4節後半は“wayyih’yû”(3人称複数)で始まる。G. W. Coats は上掲書 277 頁で、11 節前半 α と 4 節後半を “transition passage of time” としている。REB (Revised English Bible), NAB (New American Bible), TOB など 4 節後半からあらたな段落が始まるものとしている。

²⁰ “*mašeqeh*” は動詞 “*šqh*” の使役形分詞からの男性名詞である。*mašeqeh* の意味は給仕役、飲物、湿潤など。40 章では 9 回使われている。他にヨセフ物語では 41 章 9 節で用いられている。ネヘミヤ書 1 章 11 節、2 章 1 節ではネヘミヤがペルシア王の給仕役と言われており、列王記上 10 章 5 節＝歴代誌下 9 章 4 節にも登場する。ここでの給仕役に関しては、R. de vaux, *Les Institutions de l'Ancien Testament, tome 1* (Paris 1976) 187 頁参照。

²¹ 動詞「焼く」(*ph*) が焼くものは基本的にはパンである(レビ記 26 章 26 節)。料理役(*ōpeh*)は動詞 “*ph*” の分詞からの男性名詞である。40 章で 7 回用いられている。41 章 10 節の他、サムエル記上 8 章 13 節(ここでは娘)、エレミヤ記 37 章 21 節、ホセア書 7 章 4 節、6 節(怒り、*ap* とも解される)等参照。A. W. Jenks, “Baking, Boiling, Cooking, Roasting” *ABD*. vol.2, 250～254 頁参照。R. Wakely, “# 685 *ōpeh*”, *NIDOTTE*, vol.1, 478 頁参照。

²² 39 章ではポティファルの妻にも名前がなかった。40 章ではポティファルの職名は出て来るが、彼の名前はない。

とされているが、2, 9, 20, 21, 23 節では給仕役の長 (šar hammaš'qīm) と述べられ、2 節では役人 (sarīs) とされている。料理役に関しては、1, 5 節で単に料理役 ('ōpeh) とされているが、2, 16, 20, 22 節では料理役の長 (šar ha'ōpim) と述べられ、2 節では役人 (sarīs) とされている²³。

給仕役、給仕役の長、役人。料理役、料理役の長、役人。ファラオの家臣の二人に関して 40 章では三様に言われているが、それぞれ同一人物である。これは、のちにヨセフが夢を解き、三日目にファラオが二人の「頭を上げる」と言うが、この一つの表現が相異なる二つの意味を持っているのと反対に、三様の表現が、同じ一つのことをあらわしていると考えられる。

興味深いことは、「長」(šar)の用法で、2 節では給仕役の長、料理役の長の「長」(šar)としてあったのが、3, 4 節では、侍従の長 (šar)として出て来るということである。同じ単語を使いながら違う役職の長を表示している。「頭を上げる」が同じ一つの表現でありながら、二つの異なった意味をあらわすことに少し関連した用法である。

③ 場面設定 (3 節～4 節)

40 章は 39 章 20 節後半からの牢屋での話の続きであるが、3～4 節にかけてその牢屋に関して二つの単語が使われている。一つは牢 (miš'mar, 3, 4, 7 節) で、もう一つは牢屋 (bêt hassōhar, 3, 5 節) である²⁴。他に 15 節の「穴」(bôr) が牢屋を意味している²⁵。40 章では牢屋を意味する同義語が三語用いられていることになる。これもやはり意図的に三様の表現で同じ一つのことを表そうとしていることと思われる。

²³ 以下本稿では、給仕役と給仕役の長、料理役と料理役の長とを区別せず、単に給仕役、料理役と記す。一般的に給仕役と料理役は J 資料、給仕役の長と料理役の長及び役人は E 資料とされるが、ここではその問題についてはふれない。

²⁴ ここでは miš'mar を牢、bêt hassōhar を牢屋と訳す。

²⁵ 37 章ではこの単語が 7 回使われている。20, 22, 24, 24, 28, 29, 29 節。ヨセフ物語では他に 41 章 14 節に出て来る。エレミヤ書 37 章 15 節～16 節、ゼカリヤ書 9 章 11 節等参照。

「牢」(miš^emar) という単語は “šmr” (守る) から派生した名詞である。この単語は 39 章には出て来なかったが、40 章以降 41 章 10 節, 42 章 17 節, 19 節にあらわれる²⁶。他方、牢屋 (bêt hassōhar) という単語はすでに 39 章に出て来ており²⁷、40 章の場面はこの続きである。

牢 (miš^emar) は侍従長の家 (bêt šar haṭṭabbahîm) にあり (3 節), この「家」(bêt) という単語に続いて牢屋 (bêt hassōhar) という単語が出て来る。ここでも同じ家 (bêt) という単語を用いながら違った二つの場所をさしている。14 節の「この家」(habbayit hazzeh) は侍従長の家 (bêt šar haṭṭabbahîm) と牢屋 (bêt hassōhar) の両者を合せもって意味するであろう。

(2) 給仕役と料理役の夢 (5 節～8 節)

① 文学構造

5 節は「彼らは夢を見た」で始まり、8 節前半にも「我々は夢を見たが、それを解く者がいません」とある。また、8 節後半では「(夢を) 解くことは神に属することではありませんか」とのヨセフの言葉があり、「夢を見る」ことと「夢を解くこと」が意味上の枠組を形成していると考えられる。

前半 (5 節～6 節) は叙述文、後半 (7 節～8 節) は会話文である。会話はヨセフ (4 語)→二人 (5 語)→ヨセフ (6 語) となっており、9 節からはその二人が別々に語り、それにヨセフが答えるという形式である。

② 時間と空間

時間的経過に関しては、先にのべたように 5 節から 7 節にかけて、夜→朝→今日 (昼) という推移がある。場所的設定に関しては、3 節～4 節同様に牢屋 (bêt hassōhar, 5 節) と牢 (miš^emar, 7 節) の二つの

²⁶ 42 章 19 節は “bêt hammiš^emar”。一般に牢 (miš^emar) は E 資料、牢屋 (bêt hassōhar) は J 資料 (あるいは R^j) と言われているが、ここではその問題についてはふれない。

²⁷ 39 章 20, 20, 21, 22, 22, 23 節。この単語はヨセフ物語にしか使われていない。“sōhar” については A. H. Konkel, “# 6045 sōhar”, *NIDOTTE*, vol.3, 228～229 頁, K. van der Toorn, “Prison”, *ABD*, vol.5, 468-469 頁参照。

単語が使われているが、7節では「主人の家」(bêt 'adonai) の牢と言われ、これは3節の「侍従長の家の牢」と対応する。

3節：侍従長の家の牢 (b^emiš^emar bêt šar haṭṭabbahîm)

7節：主人の家の牢 (b^emiš^emar bêt 'adonai)

通常、主人と訳される単語、アドナイ ('adonai) はすでに1節に出ている。しかし、そこでの主人はファラオであり、7節の主人はファラオの部下で二人の上司である侍従長という違いがある。ここでも同じ単語を使いながら異なった意味を持たせるという技法が用いられている。

5節から8節にかけては、前置詞「～において」(b^e) をともなう、時間と空間の設定が交互になされている。「同一夜に」(5節前半)→「牢屋に」(5節後半)→「朝に」(6節前半)「→牢に」(7節)

IV 給仕役の夢(9節～11節)と料理役の夢(16節～17節)

(1) 導入文

会話の導入文の verba dicendi は、給仕役の夢の場合に於いても、料理役の夢の場合に於いても、「言う」('mr)が用いられている。ただ、給仕役の夢の時には、「言う」の前にヨセフに夢を「語る」(spr)と記され、料理役の夢の時には、ヨセフの夢の解釈がよかったのを「見て」(r'h)と書かれている。

給仕役の夢の導入では、「語る」が「言う」の前にあって、「語り～言う」と少しくどい言い回しであるが、ここで「語る」が用いられているのは、8節でヨセフが夢を「私に語りなさい」(spr)と言っているのも、その動詞に呼応してのことであろう。

他方、料理役の夢の導入では、「見る」が「言う」の前にあるが、それはヨセフの「夢の解釈がよかった」(kî tōb pātār) ことと関連する。この「夢の解釈がよかったのを見て」は当然ヨセフが給仕役の夢を解いたこと関係する。しかし、それと同時に「彼らを見ると、彼らはあおざめていた」(6節)の「見る」(r'h)、および「どうしてあなたがたの顔色は今日(そんなに)悪いのですか」(7節)の「悪い」(r'h)とも関係するだろう。ヨセフが彼ら二人の顔色の悪いのを見ることと、料理長がヨセフの夢の解釈の良いのを見ることとが対照的である。

(2) 給仕役と料理役の夢語り

給仕役と料理役はそれぞれ夢を語るが、その夢を語る会話の構造は基本的に相似している²⁸。

① 給仕役と料理役が夢を語る言葉の最初に、「私の夢の中で」(baḥalômi) という文言がどちらの場合にもある。給仕役の「私の夢の中で」(baḥalômi) は、9 節前半の会話の導入句の「夢」(ḥalôm) を受けてそれを繰り返していると思われるが、料理役の「私の夢の中で」(baḥalômi) の前には「本当に、私も」('ap 'anî) という言葉があり、これは 16 節前半の会話の導入句の「料理役」(ha'ôpîm) の単語の綴りの中にある “p” を受けて語呂合わせをしているものと考えられる。

② 次に「見よ」(hinneh) という単語が、給仕役と料理役の夢の中でどちらにも出て来る。この「見よ」は創世記 37 章でも 40 章でも夢との関係で繰り返し用いられ、夢に対し特別の注意を喚起する単語である²⁹。

③ さらに給仕役と料理役の夢に共通するのは、「三」(š'lošah) という数である。給仕役の夢では三本の枝、料理役の夢では三つの籠が問題となっている。どちらも「見よ」(hinneh) の後であるが、料理役の夢ではこの「三」が「見よ」のすぐ後に来ているのに対し、給仕役の夢では「見よ」と「三」の間に「ぶどうの木が私の顔前にあり、そのぶどうの木に (b^e)」という文言が置かれている。料理役の夢では「三」のあとに「パンの籠が私の頭上にあり、一番上の籠に (b^e)」と続く。「見よ」(hinneh) のあと、両者はキアスムスの形式で書かれている。

給仕役の夢：「見よ」(hinneh) + そのぶどうの木に (b^e) + 三つの枝

料理役の夢：「見よ」(hinneh) + 三つの籠 + 一番上の籠に (b^e)

④ 給仕役の夢では、ぶどうの木 (gepen) という単語が 2 回使われており、2 回目は前置詞「～の中に」(b^e) と共にある。料理役の夢でも、籠 (sal) という単語がやはり 2 回用いられ、2 回目は前置詞「～の中に」(b^e) と共にある。但し、三つの枝はぶどうの木に (b^e) であり、三つの籠に関しては一番上の籠の中に (b^e) という違いがある。

⑤ 給仕役は「私の顔前に」(l^epanaw) と言い、料理役は「私の頭上に」

²⁸ ①～④までは順序は異なりつつも基本的に同じである。

²⁹ これに関しては拙稿、上掲書 22～23 頁参照。

(‘al r’ōši) と言う。一方は「顔前」、他方は「頭上」という相違はあるが、どちらにおいても身体上の位置に言及されているという特徴がある。

⑥ 給仕役の夢はぶどうの木に三本の枝があったということから始まるが、この「三」はこれ以降の夢の内容に深くかかわる。すなわち、(i)それが芽を出し→(ii)花が咲き→(iii)ぶどうの房が熟したと三段階の発展が言われている。また、11節で述べられる給仕役の行為にも、(i)取る→(ii)絞る→(iii)与えるという三段階の動作の進展が見て取れる³⁰。単語の頻度数についても11節では、ファラオは3回、杯は3回、前置詞「～を」(‘et)は3回である。

他方、料理役の夢には三つの籠に対応する「三」との関係は、給仕役の夢のようにはない。ただ、単語の頻度数に関して言えば16節～17節では、籠が3回、前置詞「～から」(mîn)と関係する単語が3回、前置詞「～の上に」(‘al)と関係する単語が3回である。

⑦ 給仕役の場合、11節は「私の手に」(b’eyadi) ファラオの杯があることから始まり、最後は「ファラオの掌に」(‘al-kap par’ōh) 杯を与えることで終わる。ここには私(給仕役)の手からファラオの掌への杯の移行がある。

他方、料理役の場合、16節は「私の頭の上に」(‘al-r’ōši) パンの三つの籠があることから始まるが、最後は「私の頭の上から」(me‘al r’ōši) から、籠から、鳥がそれら(食物)を食べることが言われている。

給仕役：「私の手に」(b’eyadi) →「ファラオの掌に」(‘al-kap par’ōh)

料理役：「私の頭の上に」(‘al-r’ōši) →「私の頭の上から」(me‘al r’ōši)

⑧ 給仕役の夢では「ぶどう」という植物が主題となっており、三つの動詞の中心に液体に関係する「絞る」という動詞が使われ、「杯」という液体の容器が出て来る。他方、料理役の夢では「鳥」という動物が主役となっており、「籠」という固体の容器から「食べる」という固体に関係する動詞が用いられている。

給仕役：ぶどう(植物)、絞る(液体)、杯(液体の容器)

料理役：鳥(動物)、食べる(固体)、籠(固体の容器)

³⁰ G. Wenham, 上掲書 383 頁参照。V. P. Hamilton, 479 頁参照。後述の「頭を上げる」も合計三回である。

- ⑨ 給仕役の夢では「私」という 1 人称単数が主語となるが、料理役の夢では「鳥」という 3 人称単数が主語となる。

給仕役：私→与える→ファラオ，

料理役：鳥→食べる→私

V ヨセフによる夢の解釈（12 節～13 節と 18 節～19 節）

(1) 導入文

給仕役と料理役の夢に対するヨセフの夢の解釈の導入文には、どちらにもヨセフが主語として明瞭に言われ、動詞は「言う」('mr) でほぼ同文である。ただ、給仕役に対する言葉の前には、「答える」('nn) という動詞が使われており、「答え～言う」(18 節) と少しくどい言い回しである³¹。これは給仕役の会話の導入文の「語り～言う」(9 節) という言い回しに対応する。

(2) 夢の解釈

- ① ヨセフの夢の解釈の部分は C. Westermann が指摘するように、解釈の部分と告知の二つの部分に分けられる³²。ヨセフの夢の解釈の最初は、給仕役の夢に対しても、料理役の夢に対しても、「これが夢の解釈です」という名詞文で始まる。

ヨセフは三つの枝と三つの籠をどちらも三日と解釈する。「枝」と「籠」という違いはあるが、「これが夢の解釈です」から「ファラオはあなたの頭を上げる」までは同文である³³。その中で「三」はその数に合わせてそれぞれ三回使われている³⁴。

- ② 二人に対するヨセフの夢の解釈が分かれるのは「ファラオはあなた

³¹ 創世記では他に 18:27, 23:5, 10, 14, 24:50, 27:37, 39, 31:14。G. Wenham, 上掲書 384 頁参照。

³² C. Westermann, 上掲書 74～75 頁参照。

³³ 12 節後半から 13 節前半 α までと、18 節後半から 19 節前半 α まで

³⁴ 「三日のうちに」の「うちに」($b^e\delta d$) に関しては Hamilton, 上掲書 478 頁, 注 6 参照。

の頭を上げる」という言葉のあとからである³⁵。この部分は二人に対しての告知にあたるが、両者を文法的に比較すれば次のようになる。

(i) ヨセフによる給仕役の夢の解釈 (13 節)

「上げる」(3 人称男性単数, yiqtol) + 前置詞「～を」('et) + 頭
 「かえす」(3 人称男性単数, w^eqatalti) + 前置詞「～の上に」('al)
 「与える」(2 人称男性単数, w^eqatalti) + 前置詞「～に」(b^e) + 手
 「ある」(2 人称男性単数, qatal)

(ii) ヨセフによる料理役の夢の解釈 (19 節)

「上げる」(3 人称男性単数, yiqtol)
 + 前置詞「～を」('et) + 頭 + 「上から」(me'aleka)
 「架ける」(3 人称男性単数, w^eqatalti)
 + 前置詞「～を」('ot) + 前置詞「～の上に」('al)
 「食べる」(3 人称男性単数, w^eqatalti)
 + 前置詞「～を」('et) + 肉 + 「上から」(me'aleka)

給仕役の夢に対するヨセフの告知は、前半が3 人称(ファラオ)と2 人称(給仕役)、後半が2 人称(給仕役)と3 人称(ファラオ)と、それぞれ2 回ずつ並行的に構成されている。

他方、料理役の夢に対するヨセフの告知は、「上げる」と「架ける」の主語がファラオで、「食べる」の主語が鳥という違いはあるが、すべて3 人称で、二つの前置詞「～を」('et) + 「～上から」(me'aleka) には含まれる前置詞「～を」('ot) + 「～上に」('al) の用法から見て、枠構造で構成されていることがわかる。

³⁵ 但し、料理役の夢の解釈 (19 節) では、「あなたの頭を上げる」のすぐ後に「あなたの上から」(me'aleka) という更なる説明句がある。これは料理役が夢を語る中でよく出て来る前置詞「～の上に」('al) と深く関係するであろう。また、後述するように、「～の上に」('al) をはさんで枠構造を形成しているとも考えられる。しかしながら、多くの注解者はこの語句は付加であるとする。C. Westermann, 上掲書 70 頁参照。Hamilton, 上掲書 482 頁, 注 5 参照。

VI ヨセフの嘆願とその結果（14 節～15 節と 23 節）

ヨセフが牢屋から出られるよう嘆願するのは、給仕役に対してであって、料理役に対してではない。なぜなら、料理役は夢の解釈どおり死んでしまうからである。給仕役はヨセフの夢の解釈では、無事に出獄し、元の職務に復帰する。それゆえ、ヨセフは給仕役に自分の出獄をファラオに頼んでくれと依頼するのである³⁶。

① 14 節の始めには “kî ’im”，15 節の最初と後半に “kî” が二回使われており，“kî” が全体で三回繰り返し用いられている。最初の “kî ’im” は日本語で言えば「ところで」というような訳になると考えられるが³⁷，七十人訳聖書はこれを “ak” と読み，「しかし」(ἀλλὰ) と訳す³⁸。15 節最初の “kî” は「なぜなら，実際」というような意味で，ヨセフが自分自身はさらわれてきたのだということを言い，15 節後半の “kî” は以下の説明を導入するために用いられている。14 節～15 節の “kî” の繰り返しはヨセフの嘆願の強調をあらわしているものと考えられる。

② 動詞「思い出す」(zkr) は二回繰り返し出て来る。最初の「思い出す」は給仕役に対してのもので，牢屋を出た後では私を思い出してくださいと頼み，二回目はファラオに対しての懇願で使役形が使われている。しかし，給仕役は覚えていず，忘れてしまう結果になる。彼がヨセフを思い出すのは 41 章 9 節においてである。他にヨセフ物語の中では 42 章 9 節でヨセフが自分自身が見た夢を「思い出す」とある。夢というものが忘れ去られやすいものであるという現実と，ヨセフの嘆願が覚えておられず，はかなく忘れ去られるということが対比的に描写されている。

③ 動詞「する」(’ns) も二回繰り返し用いられている。最初の「する」は給仕役に対してのもので，自分に恵み(ヘセド)³⁹を施す(＝する)よ

³⁶ 夢に解釈が必要であったように，出獄にも仲介が必要である。

³⁷ GKC, 163d は “except” と訳す。C. Westermann, 上掲書 70, 75 頁, H. Schweizer, *Die Josefsgeschichte, Teil I Argumentation* (Tübingen 1991) 15 頁参照。

³⁸ ヴルガタ訳聖書は “tantum” と訳す。NRSV (New Jerusalem Bible), NJB (New Revised Standard Version), TOB など多くの現代語訳聖書も「しかし」と訳す。

うにと頼み、二回目の「する」は否定形で、ヨセフは自分が牢屋に入れられるようなことは何もしなかったのだというものである。「してください」（2人称、肯定形）と「しなかった」（1人称、否定形）が対立的に記されている。このヨセフの「何もしなかった」という否定形は、23節で給仕役が「思い出さなかった」という否定形と対照的である。ヨセフの場合はよい意味での、給仕役の場合は悪い意味での否定形である。

④ 前置詞「～から」(mîn)も二回使われている。「この家から」出してくれるようにという箇所と⁴⁰、「ヘブライ人の地から」さらわれてきたのだという箇所で、最初の「～から」はよい意味での、二回目の「～から」は悪い意味での文脈での用法である。

⑤ 15節の最後に「彼らは私を穴に置いた」とあり、「穴」(bôr)という単語が使われている。この穴はここでは牢屋の意味である。すぐ先に書かれてあるヘブライ人の地からさらわれてきたということと関連し、37章で兄弟からヨセフが穴に投げ込まれるという箇所の単語と同じである⁴¹。ここでは「穴」に二重の意味が持たせられている。

⑥ 14節～15節の場所に関しては、「この家から」→「ヘブライ人の地から」→「ここ」→「穴」という順序で、広く言えばエジプト→カナン→エジプト→エジプト（カナン）の地域である。

⑦ 23節は短く七語でヨセフの嘆願の結果を述べる。「給仕長はヨセフを思い出さず、忘れてしまった」と否定形と肯定形で、嘆願の忘却を強調している。さて、ヨセフの嘆願はどうなるのであろうか。給仕役は生き残り、料理役は死ぬが、ヨセフ自身はどうなるのか。生きるのか、死ぬのか、それはまだ不明である⁴²。ヨセフによる夢の解釈の実現はありながら、彼自身の生死は未知のまま残る。

³⁹ 39章21節にもこの単語は出て来ている。

⁴⁰ G. Wenham は「ヘセド」とともに出エジプト記20章2, 6節などとの関連を見る。前掲書383頁。

⁴¹ 注25参照。

⁴² C. Westermann は“V.23 ist eine Überleitung zum folgenden”と言う。上掲書78頁。

VII 夢の実現（20 節～22 節）

(1) 単語の用法

20 節～22 節にかけて、13 節と 19 節で語られたヨセフの夢の解釈の実現がある。ここで二人の運命が分かれるという理由からか、二回繰り返し登場する単語がいくつかあらわれる。

- ① 「三日目はファラオの誕生日であったので」（20 節）の文章の中に、「日」「yôm」が二回使われている。既に述べたように、40 章の中で「日」「yôm」は何回か出て来るが、最後に決定的な時としての三日目が登場する。それはファラオの誕生日で、「生命」と関係する重要な日である。
- ② 20 節は「すべての下僕たちのために宴会をし⁴³」と「下僕たちのいる中で」と、「下僕たち」（‘abad）という単語が二回出て来て枠組みを構成している。その中に「給仕役の長の頭」と「料理役の長の頭」を上げることが並行的に語られている。
- ③ 20 節では給仕役の長の頭と料理役の長の頭が上げられると並行的に記されているが、21 節～22 節では給仕役の長と料理役の長が実際にどうなるのかという文章がキアスムス（交差法）の形式で書かれている⁴⁴。これはここで二人の運命が分かれ、一人は生き残り、一人は死ぬという対立した結果になることを文体上からも表現しているものであろう⁴⁵。

21 節：動詞（wayyiqtol）＋給仕長

22 節：料理長＋動詞（qatal）

⁴³ 「宴会」（miš’etteh）は「飲む」（šth）に由来し、「飲ませる」（šqh）の派生語である「給仕役」（maš’eqeh）に意味論的に関係する。

⁴⁴ G. Wenham, 前掲書 380 頁, Notes 参照。

⁴⁵ 夢の解釈（pātār）という単語は給仕役には使われず、料理役のみにしか用いられていない。また、21 節の給仕役に関する記述は 11 語で、22 節の料理役に関する記述は 8 語と、料理役に関する記述の方が短い。これは 9～13 節の給仕役の夢とその解釈の記述が 39 語＋29 語で、16 節～19 節の料理役の夢とその解釈の記述が 32 語＋27 語と、料理役に関する記述の方が短いのに相当する。

(2) 「頭を上げる」

13 節で給仕役、19 節で料理役に対してヨセフが言った「頭を上げる」という言葉は、20 節以下で実際に現実のものとなる。ただ、同じ表現でもその意味内容には二つの相反するものがあり⁴⁶、これは 40 章の key phrase と言うことが出来る⁴⁷。同じように頭を上げられても、一方は元の職に復帰し生き延び、他方は木に架けられて死ぬという結果になる。ここで「頭を上げる」というのは、精神的に解釈して良い意味で面目をほどこす、頭を高々と上げる、物理的に理解して悪い意味で文字通り頭を切り離して上げることである。

旧約聖書の中で、「頭を上げる」(naš'a r'ōš) の意味はいろいろある。民数記 1 章 2 節などでは人口調査の意味で使われている⁴⁸。ここで頭は人の意味で、頭数(あたまかず)を数える、人数を数え上げるために「頭を上げる」(naš'a r'ōš) と言われている。

士師記 8 章 28 節、ゼカリヤ書 2 章 4 節、ヨブ記 10 章 15 節などでは、相手に屈服する意味で「頭を上げることができない」と否定的に使われており⁴⁹、詩編 83 編 3 節では相手に向かって立ち上がる攻撃的な意味で「頭を上げる」と言われている。これらの箇所では相手との関係で、反抗と服従の意味を持っている⁵⁰。

創世記 40 章での「頭を上げる」という表現に、C. Westermann や、

⁴⁶ C. Westermann は “Doppelsinn” と言う。上掲書 75 頁。G. von Rad は “Wortspiel” と言う。Das erste Buch Mose/Genesis (ATD 2-4; Göttingen 1987) 304 頁。七十人訳聖書は 13 節と 20 節の「頭を上げる」を「職務(=頭, ἀρχή)を思い起こす」と訳し、19 節の「頭を上げる」を「頭を切り離す」と訳す。

⁴⁷ E. A. Speiser, Genesis (AB. 1. New York 1962) 308 頁。

⁴⁸ 出エジプト記 30 章 12 節、民数記 1 章 2, 49 節, 4 章 2, 22 節, 26 章 2 節, 31 章 26, 49 節等。

⁴⁹ 日本語の表現, 「頭が上がらない」, 「頭が下がる」とは意味合いを異にする。

⁵⁰ “rûm r'ōš” も「頭を上げる」を意味する。詩編 3:4, 27:6, 110:7, 140:10 等参照。創世記 39 章 7 節には「目を上げる」(naš'a 'ain) という表現があるが、これは悪い意味(色目を使う)で使われている。39 章 4 節と 21 節の「目」('ain) は、7 節をはさんで良い意味で用いられている。39 章の「目」の用法は、40 章の「頭を上げる」が両義的なのに呼応していると言えるだろう。

G. von Rad は儀式的な用法を読み取り V. P. Hamilton は「召喚する」意味を見て取る⁵¹。

おそらく、40 章の給仕役の「頭を上げる」の意味に一番近い例は、列王記下 25 章 27 節である。そこで、「王はユダの王ヨヤキンを牢屋から頭を上げて」（直訳）とある。この箇所と並行箇所、エレミヤ書 52 章 31 節では、「ユダの王ヨヤキンの頭を上げ、牢屋から出し」とある⁵²。エレミヤ書 52 章 31 節は頭を上げることが、牢屋から出すことであると補足説明をしている。但し、料理役の「頭を上げる」に関してはこのかぎりではない。

「頭を上げる」という表現以外に、「頭」という単語は給仕役には使われておらず、料理役の場合にのみ二回用いられている。それは彼の頭の上に籠があり（16 節）、鳥が籠から、頭の上から（17 節）食物を食べるという箇所である。これは彼の頭が実際に切り離されることと関連するものであろう。

VIII エピローグ

ヨセフは給仕役の夢の三本の枝を三日と解き、料理役の夢の三つの籠も同様に三日と解す。そして、三日目に夢は現実のものとなる。ここで三という数が共通するが、なぜヨセフはそれを日と結びつけ三日と解釈したのであろうか。その理由は明白ではない⁵³。

37 章でヨセフが夢を見たのは明白ではないが一夜のことであろうと推測される。他方、40 章でファラオの二人の家臣が夢を見るのは明白に一夜のことである（5 節）。しかしながら、その夢の実現は三日を要する。37 章の夢が一夜のことであったと思われるのに対し、40 章の夢の解釈が実現するのは三日目のことであって、ヨセフ物語の夢の話は時間的

⁵¹ C. Westermann, 上掲書 75 頁, G. von Rad, 上掲書 304 頁参照。
V. P. Hamilton, 上掲書 479～480 頁参照。

⁵² 但し、新共同訳聖書はどちらも同じく「ユダの王ヨヤキンに情けをかけ、彼を出獄させた」と訳す。

⁵³ G. von Rad, 上掲書 304 頁参照。

に進展する。

また、40章の主要な人物は三人であって、給仕役は生き残り、料理役は死ぬが、ヨセフはどうなるのかわからないという両者の中間的な状態で、三者が鼎立している。すでに見たように、40章に出て来る単語や用語の頻度が三回、あるいはその倍数⁵⁴であったりするのは、やはり三日に関連してのことであろう。

37章のヨセフの夢では「ひれ伏す」という動詞が三回（7，9，10節）使われているが、40章のヨセフの夢の解釈では「三日目に頭を上げる」という表現が三回（13，19，20節）用いられている。どちらにおいても重要な語句が三回ずつあらわれる。しかしながら、「三日目に頭をあげる」という夢の解釈は現実のものとなりながらも、ヨセフの夢の「ひれ伏す」はまだ現実のものとはならない。

⁵⁴ エジプト王＝3回，ファラオ＝9回，給仕役＝9回。